

# 『内側から見たアメリカ人の習俗』——第十四～五章

(フランセス・トロロープ著 一八三二年出版)

杉 山 直 人

## 第十四章

アメリカの春——オーウェン氏とキャンベル氏の討論——公開舞踏会——男女席を同じゅうせず——アメリカ的自由——処刑

アメリカの春は秋ほどには快適でない——どちらもよろめくような足取りで、ゆっくりとしか移ろわない。ところが、こうしたぐずついたペースが秋には快適なのに、春はずいぶん悩ましい。一步毎に優しく快適になってゆく友に別れを告げそうなのが秋で、その歩みを遅くさせようにもそうできないのだが、黒い霜や肌を刺すような突風に閉じ込められた春は、自分が燻製になるのが最善の慰めになるような、そんなわびしい冬という洞窟から逃げ出そうとしている最中だから。

だが考え直せば、アメリカの春は歩みが遅いと不平を鳴らすより、アメリカには春がない、と宣言するほうが正しいだろうと思う。クリスマスのあとは冬をいい加減に扱えなくなるが、それまでは美しい秋が長居することがあり、われわれだったら春と呼ぶ数ヶ月のあいだも概して冬が頑固に春を捕まえて離さず、その冬が急に背を向けてしまうと春の代わりに夏とあいなる。

気候が考えられないほど不確かなので、こうした変化がいつ起きるかについて大胆に明言することはしまい。というのも、どの時期をわたしが口にしたところで、冬だと言った時期に温度計は華氏百度だったり、夏が始まるのはいついつだと言った時期からずいぶん後になって、温度計が華氏五十度になるのを引用して、彼女は間違っている、と天気担当記者が証明してみせるのは容易いことだろうから。

イギリスの気候は不安定だとみんなが言うが、アメリカの気候を経験した人は誰もそうは言うまい。正確さなら信頼できるある紳士が、自分は半日のうちに四十度以上も気温計が変化するのをなんども知っている、とわたしに言ったことがある。まことに不快で気温がこうして気まぐれに変わるのは、アメリカの気候が健康に良くないひとつの原因になっていると思う。

寒さで震えるのにうんざり、薪を燃やし続けるせいで（ついでに言うと、薪の値段たるやパリとほぼ同じだし、アメリカの多くの地域ではもっと高い）体も半分ぼろぼろになっ

た頃、ついに夏がいきなり満開の体でやってきて、製氷室、屋根付き回廊、それに巻き上げ式ブラインドが大人気となる。

いつの時代、いかな国でも前例が見られない（とわたしは思う）ショーをシンシナティが提供したのはこの年（一八二九年）の初夏だった。世間ではラナーク、ニューハーモニー、テキサスのすべて、あるいはそのどれかを名前の後に付けることでよく知られたオーウェン氏（訳注「空想社会主義者」ローバート・オーウェン〔一七七―一八五八〕）が合衆国中の宗教心篤い人びとに、これまで地上で伝えられてきたすべての宗教が真実なのか虚偽なのかを公開の場で自分と議論しようではないか、と挑んだのである。さらに申し立てて言うには、自分としては宗教はすべて等しくまやかして、ほとんど同じように有害である、と。まこと恐ろしいこの挑戦はニューオリンズの新聞を通して世間に伝えられたが、しばらくは反応がないままだった。とうとう（ユダヤではなくてケンタッキー州の）ベタニヤから、アレクザンダー・キャンベル牧師が同じく新聞紙上で自分が挑戦に応じてもいい、と公言した。この珍しい議論の舞台に設定されたのがシンシナティだったのである。時は一八二九年五月の第二月曜日、牧師が挑戦を受けてから一年近くが経っており、そのあいだに討論者は準備を整える時間があった。

オーウェン氏の準備たるやしかし、駆けっこしている人間が読書できる程度でしかなかったろう。というのも、一年のあいだ彼は北米を大部分踏破し、二度大西洋を渡ってイギリス、スコットランド、メキシコ、テキサスなど、わたしの知らない場所をほかにもあれこれ訪問したから。

聞くところでは、キャンベル牧師はこの時期をずいぶん違った風に過ごし、手近な神学書籍は全部読み、粘り強く大々的に研究したとか。にもかかわらず、キャンベル牧師の友人、またシンシナティのクリスチャン全体に彼の学識と敬虔が、どれほど自信を鼓舞したにせよ、町でいちばん大きな教会の長老派牧師ウィルソン氏は、自分の教会でふたりが公開討論するのを許可する気にはなれなかった。公開討論を聞いてみたいとみんなが思い、この教会ほど大人数を収容できる建物もなかったから、不許可にたいしては強く異が唱えられて残念がる声もしきりだった。

千人が入れるメソジストの集会場が最後に選ばれた。説教壇のまわりに討論者と速記者が座れる小さな舞台がしつらえられ、討論の間中、説教壇自体はキャンベル牧師の老いた父が占めることとなった。流れるような白髪、いつも洞察力あふれる注意を傾けているのが分かる立派な顔つき、これ以上はないほど学殖豊かな関心など、一座のなかで彼はまことに目立った人物だった。集会場の目立つ一隅にべつの舞台が設けられ、仲裁役として選ばれた七人の紳士が着席していた。

チャペルも等しく分けられ、半分が女性用、もう半分が男性用だった。混み合ったり、女性が来ても妨げになるものがないよう、女性専用の入り口ドアには注意深くガードが定められていた。こうした配慮について、御婦人たちはオーウェン氏に世話になっている

な、とわたしは感づいた。こんな場合に女性への留意を怠らない手配というのは、けっしてアメリカ的ではないから。

オーウェン氏が立ち上がると、人びとが建物の至る所に押し寄せた。聴衆、会衆（どちらと言えばいいのか分からないほどだった）は市民のなかでも、もっともレベルの高い人たちで、申し分ない御婦人たちがかぶった帽子が揺れ、その様子たるや教会のニックネームである「ふたつ角（つ）の教会」が喜びそうだった。

オーウェン氏が最初に演説したが、これ以上はないほどの深い沈黙と注意を払って聴衆は演説に接した。実際、この演説はクリスチャンの男女が聴き入ったなかで、もっとも風変わりなものだった。

このときの演説と、キリスト教伝道の歴史はすべてペテンで聖なる伝道の起源にしても寓話にすぎぬ、という自らの成熟した確信を雄弁に口にする人物の妥協なき態度とを思い出すと、あんな風に聴衆が聞き入った事自体をいまは驚かざるをえない。そのときは不思議とも感じなかったが。ラテン語で「態度は穏やかにして事を成すには決然と」という言葉があるが、オーウェン氏ほど力強く有効にそれを実践してみせた人はいなかった。優しい声の調子、穏やかで茶目っ気もときにあるが決して皮肉っぽくはない物腰、激越だったり辛辣な表現は見当たらず、「全人類家族」のために表明される愛情に満ちた関心、じっさいに自分が間違っているなら、それを確信できればいいのにと、という願いを明らかにする際の率直な雰囲気——親切な微笑み——まなざしに込められた穏やかな表情——要するに、彼の態度すべて、敵意のない情熱、彼の言葉を聞かなかった人にはそんなことができるとは思えないような寛大さなど……

熱弁をふるうふたりに割り当てられた時間は各々半時間で、それを過ぎると仲裁役が時計を眺める姿が見られた。オーウェン氏も（話を中断せずに）自分の時計を見て微笑むと、頭を振り「少しだけご辛抱を」と（ついでに）言うておいて、もう半時間ほども喋り続けた。

次にキャンベル牧師が立った——体つき、声、物腰すべてが彼に好都合だった。第一撃で氏が使った武器は一般には相手方に属すると考えられてきたものだった。情け容赦なくオーウェン氏に問いただしたのである。平行四辺形の議論だといって困らせるかと思うと、人間として完璧だと批判したので聴衆は誰もが爆笑して、それが止まなかった。オーウェン氏自身もいっしょになって心から笑い、自分が聞いていることがおもしろく愉快で、きっと他にも有益なことが続いて出てくるのを楽しもうという気になっている感じで牧師の話にずっと聞き耳を立てていた。半時間のあいだ牧師の話にわたしたちが聞き惚れていたのを思い出させたのは、キャンベル牧師の時計ただひとつだけだった。時計を見たあとも数分間言葉を続けると、聴衆全体の賞賛（とわたしには思えた）を受けながら牧師は腰を下ろした。

オーウェン氏が再度語りかけた。まことに元気な牧師の笑いが、彼自身に残してくれた

パワーへの賛辞に最初の五分は終始した。だが調子をそこで変えてオーウェン氏が言うには、この問題はあまりに重大だから次の半時間を、まえの半時間ほど軽々しく愉快には過ごせない、という。次にオーウェン氏は人間性をめぐる氏なりの基本原則十二条を聴衆相手に読みあげた。この十二条をずいぶん苦勞して世界中の国民にあまねく彼は流布したから、ここでそれらを繰り返すには及ばない。この十二条は正気の人なら誰も反対しようとは思わない自明の理でしかないようにわたしには見える。だが、長い歳月をかけた飽きることを知らぬ熱弁をとおし、これらの法則を説明し弁明することが、ペンと声を用いる仕事をオーウェン氏に提供し、また彼が十二の法則を曲解してキリスト教への異議申し立てとなさしめる、とは誰が想像しえたか、わたしには理解できそうもない謎である。

このとき以降オーウェン氏は十二条の背後に壕を掘って身を潜め、いっぽうキャンベル牧師も啓示された宗教が真実であることを証す、まことに精妙な神学的権威を持ち出すことに終始した。

どちらも相手に答えるというより、議論開始時に自分たちの心のなかでもっとも重大だったことを発言しただけ、というのがわたしの感じである。このことはキャンベル牧師の側にとって残念だと思った——というのも、もしも本ではなくて自分自身にもっと頼っていたとすれば、牧師はもっと強力だっただろう、と信ずるから。オーウェン氏は非凡な人で確かに才能はあるが、自分自身のぼやけた理論にまったく行き暮れてしまい、自らの周囲で現実に存在する世界を一瞥するために理論を見通すだけの力を喪失している、とわたしには見える。

議論が終了したとき（十五回続いた）、キャンベル牧師は全聴衆の着席を求めた。みんなが従った。キリスト教の「いやさか」を望む者はみんな起立して欲しいと彼が求めると、一瞬のうちに大多数が立ち上がった。再度着席を求め、今度はキリスト教の教えを信じない人が立って欲しいというと、紳士が数人に婦人がひとりだけ従った。オーウェン氏はこれを「操作」と呼んで抗議し、男性の精神状態や女性の精神状態について、なんらの証拠がもたらされているわけではないと信じる、と言い、現状ではこうした結果は予想されたばかりか、養うべき子供のいる男なら誰でも、顧客の大多数の気分を損ねるかも知れないような意見を宣言して、ブタや鉄の販売を危うくすることがないようにするのが男たる者の義務だと断じた。聞いたところでは、十五回の議論が終わっても、キリスト教を信じる者とシンシナティの不信心者の総数とは、議論が開始されたときとまったく変わっていなかった、とか。

おそらく、こうしたことは予期できたかもしれない結果だった。だが、もっと予想がつかなかったのは、いずれの論争者も冷静さを失うことがなかったように見えたことである。ふたりは長くいっしょにいて常に食事をともにし、あらゆる機会を捉えて互いに尊敬の念をまこと懇（ねんご）ろに語った、という。

思うに、こうしたことが起こりえたのはアメリカだけだろう。これが他のところで起き

たほうが望ましかったかどうかは確信が持てない。

西部の活気ある町でのわたしたちの暮らしに変化を与えたいろいろな素晴らしいできごとを留めてきたが、いわゆる誕生舞踏会について語るのは省いてしまった。このお祭りは確か、連邦中のあらゆる町や都会で二月二十二日に予定されている。ワシントン将軍の誕生記念日だから祝祭日としてアメリカ人が注意を払うに値するのである。

舞踏会に足を踏み入れて一瞥したときは驚嘆したが、それは大きな部屋がたいそう見事に着こなした人びとでいっぱいだったからで、そのなかにはずいぶん美しい娘たちがたくさんいた。殿方もえらくスマートだったが、アメリカ西部にそれほど長くいたわけではないわたしにすれば、盛装してまえを通り過ぎてゆく「洒落者」のほとんど誰もが町の店に入り口あたりにゴロゴロしていたり、カウンターの後ろにいたのを見慣れた店主や店員なのを認めて驚かないわけにゆかなかった。このうえなく魅力的で美しい若い女性が、長兄たる者に投げかけられるのをわたしが目にしたことがあるのと同じ熱心さと満足で、こうした殿方に微笑みかけては品をつくって作り笑いするので、この紳士たちがもっとも地位が高い人たちだと考えられていると感ぜざるをえなかった。とはいっても、階級区別はないのだと考えてはならない。この舞踏会で見かけた数多いたいそう美しい若い女性のなかに、わたしは一層美しいひとりの女性を捜したが、それは先にお話ししたことのある学校の試験で彼女の可愛い顔に強い印象を受けていたからである。彼女が見つからないので、とある紳士になぜ美しいC——さんがいないのか、と尋ねてみた。

彼が答えるには「わたしたちの上流階級をまだお分かりになってないですね。C——の家族は職人ですよ。」という。

「でもC——さんは、ここに見かける人たちと同じ学校で教育を受けたでしょう、それにお兄さんは町に店を持っていますわ、ここにいる若者たちみんなが経営してる店と同じように大きくて繁盛してるようだし。どこが違うっていうんです？」

「彼は職人なんです。自分が売ってる物を作る手伝いをしてるだけで、ほかの連中は自分のことを職人だと言いますよ。」

このときの踊りは、イギリスの田舎町の定期裁判や競馬に関連して開かれる舞踏会で目にするものと違ってはいたが、さりとて、まったく似てはいないとも言えない。「スクエアダンス」とは言わないで「コティヨン」と呼んでいて、一連の動作はオーケストラから英語で呼びかけるが、それがヨーロッパ人の耳にはずいぶんおかしな印象となる。

夕食の段取りはたいへん風変わりで、著しくアメリカ的である。殿方はホテルの別の大きな部屋で自分たちのために素晴らしいもてなしを準備させているのに、女性は気の毒にも男性が消えたあいだ、寂しげに舞踏室を歩いて各人が手に一枚ずつ料理皿を受けとるといふ仕儀。やがて召使いが砂糖菓子、ケーキそしてクリームを載せた皿を持ってやって来る。すると美人たちは壁に沿って並んだ椅子に腰を下ろし、膝をテーブル代わりにして甘く悲しく、そして不機嫌なお菓子を食べだす。その印象たるやきわめて滑稽である。お祭

り騒ぎのようなドレスや飾り立てられた部屋が、彼女たちの不快によるべない状態となんとも説明のつかない対比をかもしだすから。

こうした準備は節約のためでも、全員を収容するだけの広さを持つ部屋がないからでもなく、ただ純粹に殿方がその方が好きだから、というだけのこととか。紳士淑女がいっしょに夕食を取らないのはなぜか、好奇心に駆られて尋ねてみると返ってきた答えがこれだった。あとで同じ質問をいろんな人にしても、繰り返し私が聞いたのは同じ答えだった。

執拗になんども、アメリカ的習俗に備わったこうした特質を語る結果となっているが、なぜかというと常に繰り返されるからというだけでなく、私の考えるところでは、男女の区別なく、よき習慣と上品な物腰に存在する（ずいぶん顕著な）普遍的欠陥を引き起こすおおいなる原因となっているからである。

宮廷のないところでは——ある所ならどこでも、宮廷では上層階級が正装し、それが下の階層に反映され、ある程度まで人口の大多数を洗練へと向かわしめる——礼儀作法が研究対象となったり、社会全体に等しく優雅さが達成されることは期待できないが、アメリカでうかがえる欠陥なり全面的異質性は、宮廷がないというだけでは説明がつかない。世界中楽しみの時間は人間にとって重要で、どこに行っても人びとはそうした時間を最大限有効に利用しようとする。知的であれ社交上であれ、人との付き合いのなかでだけ自分も楽しめる人たちは、その心づもりをしているのに、寂しくお菓子を食べて満足しなければならないということでは、みじめというもの。他方、引っ込んでいることが最大の楽しみとなる人は、人との付き合いでは与えることも受け取ることもほとんどない。男女ともに互いに出会う場所で最大の楽しみが見いだされるところならどこでも、双方ともに有効に準備ができるというもの。そうしたところなら男がタバコをかむ、あるいは唾を吐き散らす贅沢に耽ることもなければ、女性だって疲れを知らぬお茶入れ機械よりは高い地位を、なんとか維持することもできよう。

ほぼ全面的に未婚男女に限定されてしまうダンスを除くと、アメリカでは男性の楽しみはすべて女性の姿がないところに見いだせる。多人数の集団で食事してトランプを楽しむ、音楽会を開いて夕食をとるが、そのどれにも女性は見当たらない。そんなことが習慣になっているわけではないというなら、家庭内で富裕層の妻や娘たちがほとんど独力でおこなう、むさ苦しい重労働なんかしないで済むよう、なんらかの便宜を見つけるための創意工夫を男たちがなにもしてやらない、などということはある得ない。奴隷州にあっても、さすがに透明ノリを使ってアイロンをかけ、プディングやケーキの粉を半日こねたあとで焼き上げるのを残りの半日かけて見守るような真似はしないが、それでも、もっとも高貴な女性たちにしても、優雅にして啓発された伴侶にはなれそうもない様子で家事に専念している。バルチモア、フィラデルフィアそれにニューヨークでは例外的な女性にあったが、田舎全般について言えば、確かにこの通りである。

心から嫌っている場所で、しかも当初期待していた都合よい結果もなさそうだと心配するような暮らしが長引くのうんざりしていなければ、それまで話したことのある人びとの考えや意見は、ほとんど尽きることなく楽しみの源になっただろうし、実際にかなりおもしろく味わうこともあった。

すでにお話しした通り、わたしたちは個人的親切をおおいに受けたが、だからといって、そうした親切が真のアメリカ人なら誰の心の底にも明らかに生きている、押さえがたい（とわたしは信ずる）国民的反英感情の邪魔をするということは決してなかった。最大限親切で友好的な付き合いをしていても、この反英感情はささいな数多くのことで表に出てきて、ときに不快というよりはコミカルな姿を見せるのだった。

こんなこともあった——「ふーむ、お国の政府は自分たちがでっちあげたこのあいだの戦争のおかげで、きっといまにも首を吊ろっていうところじゃないの。だってあなたがたイギリスの方にすりゃ、あれは破滅だったでしょう。あの戦争のおかげで、わたしたちができたんだから。」そのあと——「ふーむ、この頃はまえよりもあなたのブローケン英語がわかるわ。でもロンドンからお越しの頃、最初わたしが、はっきり分からなかったのは当然ね。だってロンドンのスラングが世界でもっともひどいって、みんな知ってるもの。ロンドンで暮らしてる人って、“h”がないところでみんな“h”を発音し、あるところでは発音しないなんて、ずいぶん可笑しいわ。」

こんなことを言う婦人に、わたしもそうしているかしら、とうぬぼれて尋ねてみた。

「いいえ、あなたは違う。」という答えだったが、悦に入って微笑みながら彼女が付け加えるには「そのために御苦労なさってることは直ぐ分かるけど。あなたの“h”の発音でアメリカ人が笑うのを知って、わたしたち風の発音を身につけようとなさってるんですよ。」

大まじめにひとりの婦人が尋ねるには、国を後にしたのはあらゆる階層のイギリス人をさいなむノミヤシラミを一掃するためだったのか、という。「完璧な権威筋から聞いたけど、ロンドンの通りを歩くとかならず頭中ノミヤシラミだらけになるとか」とも付け加えた。

少し笑ってしまったが、わたしはなにも言わなかった。婦人は真っ赤になってこう言った。「笑うのは簡単だけど、真実は真実よ、笑われようとそうでなかろうと。」

次のエピソードは前置きが必要で、なにかといえればアメリカではほとんどすべての昆虫を「虫」という一般的な名前前で分類してしまうことである。ところが、われわれのあいだでは「虫」という名で通っている、この不運な普遍種はアメリカでは「虫」という名に含まれないほとんど唯一の例外なのである。ある婦人がやぶから棒に「チンチェ [chintzes]（訳注 南京虫のこと。スペイン語で「虫」[chinche] という発音を英語風に綴った）はお嫌いでしょう、トロローブ夫人」と話しかけてきた。

「いいえ、そんなことはありません」と答えた。「ずいぶん綺麗だと思いますよ。」

「さて！いかにもイギリス的ね。そういうのが国を愛するってことなのね。まあ、わたしたちアメリカ人には、それよりは国を愛するのにふさわしいもっと良いものがありますわ。自分が愛国者なのを証明するために、いまいまして不潔なチンチェが好きだなんて言わなくてもいいんだから。」

「チンチェか！ チンチェってなんのことですか？」

「そういうことなのね！ チェンチェがなにか知らないってふりをするわけ？ ほら、ロンドン中のベッドにいっぱいいる、ぞっとするような嫌な吸血虫よ。」

あとで知ったところでは「チンチェ」というのはスペイン語の「虫」だとか。だが、そのときは「チンチェ」がカーテンの材料インド更紗（chintz）のことだろう、としか思えなかった。

イギリスには見当たらないが、アメリカでは日常茶飯事のこうしたたぐいの「しとやかさ」は他にも例がたくさんあり、ときおり目撃した例は、御婦人方のデリカシーを立証はしても、殿方にはにぎやかなからかいを口にする機会を与えるだけだった。いろんな機会に同じことが少なくとも十回ほどは繰り返されるのを見かけたものである——例えば、雇われた若い娘が紳士用のシャツ（そう口にするだけでも完璧な墮落の兆候なのだろう）をつくっていると、紳士がひとりやって来て、やがて「なにをつくってらっしゃる、クラリッサさん？」という陽気な会話が始まる。

「妹の人形に着せるただの仕事着です。」

「仕事着だって、そりゃあり得ない。仕事着なんかじゃないな、ねえ、クラリッサ、なんなの？」

「召使いのひとりが使うエプロンよ、スミスさん」

「そりゃないよ、クラリッサ、だって両側があわさってないじゃない。なんだか言ってくれたほうが良いと思うけど。」

「まあ、だったら言うけど、スミスさん、ただの枕カバーよ」

「それならいいか、クラリッサ。じゃあ、巨人用の枕カバーだね。あててみようか、クラリッサ」

「スミスさん、いい加減にしてよ。お行儀よくしてくれないと怒るわよ。」

ここに会話が至るまえに、紳士も女性も腹の皮がよじれるほど大笑い。トンチ心（ごころ）に駆られたある若い女性が、自分はバッグ、ただただバッグを作っているだけなのを証明しようとして、男の目前で両端を縫いあわせ、勝ち誇ったようにそれを見せながら「ほら、なにか言える？」と叫ぶのを目にしたことがあった。

「人間なんて通りに散らかってるゴミ同然に見なしているような英国に戻って、子供を育てるなんてできます？」とある日、友人のひとりが愛想は良かったけれど、哀れむような調子で聞いてきたので、わたしは驚いてしまった。

どういふことか説明してくれないと分かりませんわ、と頼んでみた。



「なにも恥ずかしい思いをさせようというんじゃないわ、でも事実を言えば、あなたが考える以上に、わたしたちアメリカ人は分かってるのよ、だからわたしがイギリスにいれば、きっと殿様以外には誰ともお付き合いすることなんて考えないわ。アメリカでは、なにをするにしてもわたしはいつも最初の人間のなかに入ってたわ、だから旅することがあっても、そうしたい。あなたに会いに行かないってことはきっとないけど、あなたが殿様じゃないのはわかってるから、あなたの国でどんな扱いをあなたが受けてるか、よくわたしは分かっててよ。」

そのままにしたほうが厄介ごとにならないし、ずっと楽しいのを分かっていたので、わたしはこの手の意見に反論することは滅多になかった。じっさい、もし反論してもほとんど意味がなかっただろう、というのもイギリスについてアメリカで交わした会話のなかで、相手よりもわたしの方がずっと分かっていたのがはっきりしている例は、ひとつたりとも思い出せないから。

イギリスの国家的榮譽について、わたしはしかるべく以上のバッシングを受けたと推察する。というのも、アメリカ人が遠慮なくずばりと物を言っても女性たるわたしは異議申し立てができないから。大いなる愛国者であるひとりの夫人が、事実わたしにたいへんな気遣いを見せたことがあった、というのも誰かがニューオリンズのことを話したとき、みんなを遮って「ニューオリンズのことは話して欲しくない。」と彼女は言い、わたしの方をふり返ると、ずいぶん優しく「ニューオリンズと聴くと、ずいぶん気持ちがつらいでしょう」と付け加えたのである。

英海軍にたいするアメリカの圧倒的優位がいつもテーマになったが、できうる限りわたしは沈黙を守って聞き役に回った。繰り返し聞かされた（余りなんでもしかるべき方面から聞いたので、いささかの真実があるに違いないと思うようになった）のは、アメリカ水兵の射撃が確実に殺傷できるのにたいし、イギリス側の発砲はほとんどでたらめだ、というのだった。「これは」と評判の海軍士官が言うには「おたくの国の狩猟法がもたらしたありがたい効果ですな。イギリスの水兵は標的を狙って発砲しない。ところがうちの船乗りは獲物を追っかけて訓練しているから、誰もが毛一本だって真っ二つさ」だと。だが、わたしが至る所で出会ったアメリカ人お気に入りの、いつも出てくる普遍的冷笑はイギリス人が古くさいものに昔ながらの愛着を見せる、ということだった。

少しでもウィットがあれば、「おれのばあちゃんイギリス人」とでもニックネームを付けてくれたらろう——イギリス人にたいしてアメリカ人はこういう感じで、そうすることで自分たちを取り巻くすべてがもつ粗雑な新しさに折り合いをつけるから。「王様とか大法官それに大主教、カツラやガウンなんて大げさだし、うんざりしないですか」と、たいへん聡明な紳士がわざとらしくあくびしながら、わたしに質問したことがあった。「そんな音の響きだけで眠たくなりそうですよ。」

自分たちのほうがイギリスより近代的で進んでいると考えると癒やされるらしく、こち

らは見ていて愉快になる。イギリス文学の古典、王侯の威厳、貴族制などはすべて暗黒時代の過ぎ去りし遺物というわけである。

アメリカ人の魂には、こうしたことや自然そのままの広大な領土が満更でもない慰めとなり、自分たちの巨大な母国が、よく知っているどこかの古めかしくてつまらない小さな国ほどには、諸国のなかで意義ある存在とはならないことがないよう、しばし頭をもたげるささいな不安への解毒剤となる。

婦人方のグループと御一緒したとき、そのなかに愛国心よりも好奇心のほうが旺盛な若い女性がひとりふたり混じっていて、ロンドンの素晴らしさと広さについて、わたしにあれこれ質問してきた。精一杯うまく描写して娘さんたちに納得してもらおうとしたが、そのとき別の婦人が口を出してきて叫ぶには「お若い方、ロンドンについておしゃべりするのはおやめなさい、美しい町がなんたるかを知りたいければ、フィラデルフィアを御覧あれ。フィラデルフィアにいらっしゃればトロロープさんは、あの町のほうが、不快で汚くて不潔な通りが闇雲に大きくなっただけのロンドンとやらより、話すだけの価値があるとお認めでしょうよ。」

オハイオとコロンビア特別区でそれぞれいちど、あなたが生まれた国がどれほど軽蔑すべきちっぽけな国かを御自分の目で確かめ納得してください、とばかりに目のまえに地図を示されたことがあった。わたしは決して忘れないだろうが、ワシントンでは、ひとりの紳士が目盛り付き鉛筆入れを取り出すと反論できないほど大まじめに、規模でみると大英帝国自治領全体はアメリカで重要度がいちばん低い州のひとつにも及ばない、とわたしに示し、それが終わると自分の頭よりもかなり高く暖炉に両足をかけ、気取って「ヤンキー・ドゥードル」を口笛で吹いて見せた。

自分たちの栄光の諸制度、比類なき自由を讃えることをアメリカ人はもちろん忘れない。

栄光の諸制度とはなにかを確かめるにはいささか骨が折れたし、アメリカ人が自国を語るときは誰もが口にするこのセリフの意味をわたしが理解できなかったと公言しても、不案内をてらってるわけではない。諸制度とは病院や刑務所のことなのかと尋ねてみた。「いえ、そうじゃないわ。アメリカ独立と時を同じくする栄光の諸制度のことよ。」「じゃあ」と質問してみた。「結婚式のあり方なの、つまり牧師が取り仕切る宗教的儀式じゃなく、治安判事がおこなう純然たる市民的制度にしたことを言ってるの」

「いえ、違うわ。神から授かった政治制度のことよ。」

それでもわたしにすれば五里霧中で、なんのことだか思い浮かばない。ただし、絶え間なくおこなわれる選挙活動をアメリカ人が生きているあいだ一日たりとも、一時間たりとも中断せず間もおかず「栄光の制度」と呼んでいるとすると、話は別だが。

比類なき自由のほうが、わたしには良く分かる。アメリカ人の普通法体系はイギリスのをモデルとしている。両者の違いは、イギリスなら法に基づいて行動するのにたいして、

アメリカではそうでない、ということである。

大西洋岸の都市にある立派に整備された警察のことではない。ニューヨークで警察が整っていることは讃えられよう。ところが、そうした都会の影響が及ばないところでは、信じていただければと願って思い切つてわたしが申し立てるよりも強い、法律にたいする侮蔑がある。不法侵入、暴行、強奪、いや殺人さえ法的干渉がないまま犯行に及ぶ。

ずいぶん愉快地メリーランドで夏を過ごしたことがあったが、アメリカの流儀や徳を心得た親切な友人たちからは、わたしたちの散策について、こちらやあちらの方は止めたほうが良い、と忠告を受けることがしばしばだった。わけを尋ねると、「そこの道筋にパブがあって安全にまえを通れないから」という。

チェサピークとオハイオを結ぶ運河がS——夫人の住まいから数マイルも行かないところを通っていた。彼女のところに滞在中、運河近くで二度ほど半分むき出しの死体が見つかった。死体の状況をめぐって訝（いぶか）った人びとのあいだで、しばしの話題となった。あるとき、この件でうわさする人たちに詳細を尋ねてみると、「ああ、殺されたんだと思います。それとも運河の熱病で死んだかも。でも、絞め殺された痕があるという話もあるし。」査問委員会を招集することもなく、同じみじめな状態で羊が見つかったとしても、それと変わらないほどの騒ぎにしかならなかった。

食料が豊富なことと絞首刑が少ないのも、イギリスにたいしてアメリカが優れているのを証明するとして都合の良いトピックになっていた。なるほどどちらも立派なことだが、イギリスへの優位を証しするという推論は、わたしは認めない。住む人がまだほんの少ししかないのに、領土は広大でたいそう肥沃なのだから、住民に食物を豊富にもたらすのは容易いことだろうし、自分の町や村を「住んでいられないまでに怒り狂わせた」のを知った破れかぶれの悪漢にしても、数マイル西に旅しさえすれば牛肉とウィスキーがきつと豊富に見つかり、警察が追ってくる危険もないようなところでは絞首刑がまれにしかないのも驚くべきことではない。

シンシナティに住んでいた頃、まれに見る残虐な殺人者が逮捕され、裁判で有罪となり死罪を宣告されたことがあった。ニューオリンズで妻と子を数年前に殺していたことが公判で明らかになったが、当時はほとんど注意が払われなかった。今回司直の手に彼が委ねられた犯罪は、二番目の妻を最近殺害したことで、男に不利となった重要証言をしたのは彼自身の息子だった。

処刑の日が決まると、事件の異様さ（シンシナティで白人男性が処刑されたことはなかった）もあって興奮が高まり、六十マイルも離れたところから処刑場に居あわせようと人びとが大挙した。

いっぽうでは、すこぶる善良な人たちもおり、人を絞首刑にすることの正当さに疑義を呈する人が出てきて、判決を減刑して収監するよう、オハイオ州知事に申請した。男を裁いた法廷が下した判決に干渉することを、しばし知事は拒否したが、自らのおかれた尋常

とは言えない状況に戦々恐々、知事を攻撃した長老派一派のしつこさに根負けし、保安官に命令書を送った。だがこの命令は刑の執行猶予ではなく、絞首刑となる代わりに執行猶予を受けて刑務所に送られるほうが良いかどうかを、男に尋ねるためだった。

犯罪者にかしづいた保安官が提案してみると、男が答えるには「俺がなにか同意できることがあるとすると、おまえや息子が飼ってる俺の犬を殺せるだけは生きられればいい、という願いだが、それも嫌だ。俺を絞首刑にさせてやるぞ。」

ゾットするような処刑人の仕事を振り当てられた有徳の保安官は、あらん限りの言葉で差し出された書類に署名するように男を説得したが、無駄だった。自分の骨折りにたいして保安官が手にしたのは罵詈雑言だけだったのである。

処刑の日が来た。定められた場所は丘の斜面で、町の近くではそこだけ木が切り払われていた。定刻のずいぶんまえから、男女子供など黒山のような人だかりに覆われた。遂に処刑時刻となり、陰鬱な荷車がゆっくりと丘を登ってゆくと、騒がしかった群衆も厳粛に沈黙し、みじめな犯罪者は絞首台を登っていったが、そのとき再度、提案された減刑を受け入れて署名するように保安官が男に求めた。だが、その書類を男は鼻であしらい、大声で「吊せ！」と叫んだ。

正午がロープを切る定刻だった。片手に時計、もう一方の手にナイフをもった保安官が立ち、その手を上げてロープを切ろうとしたそのとき、犯罪者がきっぱりと叫ぶには「署名する」。群衆の叫び声、笑い、卑猥な冗談のなかを男は監獄に運び戻された。

絞首刑をわたしは好まない。だが、こうしたことすべてには、健全な正義にそなわった見苦しくない威厳とはみえないものがあった。

## 第十五章

### 野外伝道集会

長年希望していた、野外伝道集会参加への機会ができたのはこの年の夏のことで、イギリス人女性と紳士との誘いを受け、ふたりの馬車に乗って集会がおこなわれる所まで同伴したのである。インディアナ州境にある荒れ果てた地区だった。

インディアナの辺鄙な森でひと晩を過ごすと考え、けっして心地よいものではなかったが、しかるべき程度に勇気を奮い起こし、じっさいに野外伝道集会がいかなものかを自らの目を見て、自らの耳で聞いてみようと思いつき、決意も固く出かけた。野外伝道集会参加は天国の門にたたずみ、目のまえで門が開くのを目にするようなものだ、と言う人がいるかと思うと、逆にそんなものに出かけるのは地獄の門の内側に入るようなものさ、と言う人もいた。いずれにしても好奇心を満足させ、ゴトゴトと長時間かけて馬車に乗り、眠りもせず一夜を過ごす疲れを埋め合わせするものが、なにかあるに違いなかった。

真夜中一時間ほどまえに現地に着したが、そこに近づいてゆくのは絵のように美しかった。選ばれた場所は途切れなく続く森の端にあり、集会のために二十エーカーの土地が、不完全だが切り払われていた。大きさがまちまちのテントが肩を寄せ合うように空き地を丸く取り囲んで張ってあった。テントの後ろには、あらゆる種類の馬車が外側に輪をつくるように広がり、どの馬車の後ろにも集会場まで馬車を引いてきた馬が繋いであった。こうして三重の輪になった防御陣形の内側では、無数のたき火が明るく燃えている様子がわかった。さらに、囲い地のなかで切り倒されていない木々からは、おびただしい数の灯りがちらつき、頭上の月は最高に素晴らしく輝いた。

B——夫人とわたしのために、馬車にベッドを用意してくれることになる召使いに馬車は任せ、わたしたちは内側の輪のなかに入った。梢に灯る明かりと、その下でうごめく人びとのおかげで、わたしは最初見たとき、ロンドンのヴォクスフォール公園を思い出した。だが目をこらすと、それまで目撃したいかなるものともまったく異なる光景が明らかとなった。囲い地の四隅には祭壇の形にしつらえられた四本の背の高い杵組みがこしらえてあり、そのうえには土と四角に切った芝が幾層にも積み重ねられ、燃えたつ松の薪（まき）が巨大な炎をあげていた。囲い地の片方に説教師が立つ粗末な舞台がしつらえられ、十五人ばかりがこの集会に参加するという。元気を回復し個人的に祈るのに必要な短い中休み以外、この説教師たちは火曜日から土曜日まで昼も夜も順番で説教した。

わたしたちが到着したとき、説教師たちは沈黙していたが、ほぼどのテントからも祈り、説教そして嘆きがないまぜになって聞こえてきた。各テントの正面カーテンは降ろされ、ひだの付いた白いカーテンを通して漏れてくるかすかな明かりは、暗い森を背景として美しく神秘的な効果を生み、想像をたくましくさせた。まわりで反響する音がもっと調和して穏やかで自然な音だったら、わたしも楽しめただろう。だが、大きさに比べて不釣り合いな喧噪をぶちまけていたとあるテントの片隅で耳傾けるうち、想像力から生まれる情感はすべて追い出され、間違えようもなければ忘れもできない現実をつきつけられたのである。

たくさんの人があたりを歩き回っていたが、わたしたちと同じでどうも野次馬としてその場に居あわせただけらしかった。そのなかに、問題のテントの正面カーテンを片隅をひっぱって持ち上げた人がいて、内部がわたしたちに丸見えになったのである。

床はワラ敷きで、テントの隅には座席代わりになるよう、ぐるりとワラを積み上げてあったが、そのときは床に跪（ひざまず）き、輪になって体をすりあわせる男女の頭と腕を支えていた。

三十人ほどそんな姿勢の人がいたが、半分ほどは男性だった。十八歳か二十のハンサムな若者がひとり、わたしが覗いてしまったテント開口部の真下で跪いていた。彼は自分のそばでひざまずき若い女性の首に片腕をまわし、彼女のほうは乱れた髪を両の肩に垂らして激しく興奮した顔つきである。ふたりはやがてワラのうえに前屈みに倒れ込んだ——テ

ント中央にすくと立ち、信じられない激しさで祈りと説教のあいだを彷徨（さまよ）うような演説を口にしていた、黒ずくめで背の高い冷厳な人物の燃えるような雄弁にたいし、他の姿勢では耐えられないといったように。両腕を動かしてもせずにこわばらせたまま脇に垂らした彼は、組み立ての下手な器械よろしく激しい動作で動くために自壊しそうで、その言葉はひきつるように痛々しく、かつ素早く転がり出てきた。輪になってひざまずいた人たちは、いろんな口調でいつまでもイエスの名を口にするのを止めない。むせび泣き、喘ぎ、さらに耳傾けるのが言葉では表現できない苦痛を感じさせる、うめくようなうなり声で。だが、説教師や周りにいた人びとからは距離を置き、ひとりで跪く人物にわたしの注意はすぐに移った。スコット・マクブライア（訳注 サーウォルター・スコット作『オールド・モータリティ』に登場する若く熱狂的な説教師）に生き写しで、彼と同じように若く、荒々しく、そして恐ろしかったから。頭上にかざした両手は服の袂（たもと）から飛び出していたので、肘までむき出しだった。大きな両目は凄まじくキラキラ輝き、「神に栄光」という言葉を一瞬の中断もなく金切り声で叫び続け、その激しさときたら血管がどれもこれも膨張して破裂するのではないかと思われた。あまり恐ろしいので長くは見つめられず、ぞっとしてわたしは目を背けた。

並んだテントの周囲をぐるりとまわり、荒っほい音が聞こえて特に注意が刺激されたところでは足を止めてみた。たくさんのテントをなんとか覗いたが、すべて床にはワラがまき散らされ、そこに跪き、座り込み、横たわっているのが見えた人たちは体を曲げ、悲痛で痙攣するような叫びに加わり、その姿たるや各テントはさしずめ精神病院の小部屋といった風情。

ひとつのテントはなかにいた全員が黒人だったが盛装しており、まさしく舞台上で劇を演じているようだった。銀のレースで縁取りしたピンクのうすものドレスを着込んだ女性、薄い黄色の絹を着込んだ女性、なかには華麗なかぶり物をした人もひとりふたり、そして全員がおびただしい装身具を身につけていた。男たちは雪のように白いズボンをはき、陽気な色のリンネルジャケットを着込んでいる。そのなかのひとり、色は真っ黒だが容姿の優れた若者が激しすぎるほどの身振りで説教し、ときに地面から高く飛び上がり、頭のうえで手をたたくのだった。神にたいして呼びかけるという形で若者が口にしたタワゴトを、わたしたちの宣教師団が聴いていたら、改心のおかげで若者の精神がどれほど啓蒙されたのか疑ったことだろう。

真夜中、集会場全体にラッパが鳴り響いた。個人礼拝から全体礼拝へと人びとを誘うものだという。あらゆる方向からひとびとが説教師たちのいる講壇へと集まってくるのが分かった。この舞台の下の部分に背中をもたせかけ、なんとか居場所を定めたわたしたちは、おかげで個人的危険を味わうこともなく、そのあとに起きた場面を目撃できた。二千人ほどの人が集まっていた。

鼻にかかった低い声で説教師のひとりが口火を切り、メソジストの説教師がみんなそう

であるように、創り主の手から生まれた人間は計り知れないほど墮落しているが、主との葛藤をじゅうぶんに経て、主を見つけ出したのちには完璧な聖別を手にすることができる、などとあれこれ断言した。「アーメン、アーメン」、「イエス様、イエス様」、「主に栄光、主に栄光」など、ほとんど途切れずにほかにも似たような叫び声上がり、群衆の賛美が証（あか）しされた。比較的静かなこうした雰囲気は長くは続かなかった。くだんの説教師が群衆に「今宵こそ、不安な罪人がひたすら主に祈るよう定められた時なのです。」と語りかけた。自分や仲間たちが「かれらを救おうと手近にいる」から、自分たちに手助けして欲しいと思う人は「囲い」のところまで前に進みでて欲しい、と。こうした言い回しは否応なくミルトンの次の一節を思い出させた。

めしいの口よ！牧羊杖の握り方はおろか、忠実な羊飼いの技に属するものなどなにも知らぬめしいの口よ、だがめしいの口が望むと、中身の無いけばけばしい歌が浅ましい麦ワラでこしらえた耳障りな笛で不快に響き、食べ物もなく風を吸って膨れあがった腹すかす羊は顔をあげ、鼻つくような霞（かすみ）を吸い込み、体のなかで腐ってゆく——朽ちた病が広がってゆく。

「囲い」というのは、説教師がいる講壇の真下にある空間だった。だから、その隅っこにいたわたしたちは、この異常なショーのまさに中央でなにが起きたのか、すべてが見聞できた。

群衆は「囲い」という言葉を聞くと引いてしまい、しばし、わたしたちのまえには空間ができた。講壇から降りた説教師は群衆のなかに入ってゆき、賛美歌を歌って悔悛者にまえに出よう呼びかけた。歌いながら、説教師たちはいつまでも群衆相手に誰かれなしにふり向いたが、そのうち次第に大多数の人が声を出してコーラスに加わるようになった。この森の礼拝式特有のものだと聞いたことのある、厳粛で美しい印象にも似たなにかをわたしが感じとったのは、この瞬間だけだった。これほど多数の人たちの声が、彼らの永遠の森の奥底から発せられてはひとつになって真夜中に聞こえ、振り仰いだ多くの美しい若者たちの顔が、月光に照らされていっそう白く美しく見え、人びとの輪の中央にいる説教師たちの黒々としたその姿、集会のそと側にある森に祭壇のたいまつが投げかける輝く光り——こうしたすべてが作りだした素晴らしい厳粛な印象を、わたしは容易には忘れまい。ところがである。この印象をとっくりと楽しみ終えるまえに、場面が一変し、厳粛さは恐怖と不快に取って代わった。

奨励は「信仰復興集会」で耳にしたことのあるものに似てはいたが、結果たるやずいぶん違っていた。というのも、そこでの折りにはヒステリックな女性が数人いて目立ったが、今回は百人ほど、それもみんな女性がまえに進み出て、恐ろしげなわめき声やうめき声を上げるので、いま思い出しても震えが止まらない。互いを引っ張ってまえに出てくる

感じで、「祈りましょう」という声がかかると全員が跪いた。だが、すぐにほかの姿勢に変わり、おかげで彼女たちの手足は存分に痙攣できることになった。やがて、どれが頭で足なのかわからないような名状しがたい騒ぎとなって手足を絶え間なく激しく投げ出すので、いつ何時なにか深刻な事故が起きるのではないかと覚悟したほどだった。

それにしても、この奇妙な人間の塊（かたまり）から発せられる音をどう表現すべきだろう。どんな感じかをお伝えできる言葉が見当たらない。四方八方でヒステリックなむせび泣き、発作的なうめき声、金切り声に甲高い叫びが飛び出すので驚く。恐怖で気分が悪くなった。かすれて力んだ声では十分な叫びにはならないかのように、やがて両手を激しく叩きだした。ダンテが描写した場面がわたしのまえに繰り広げられていた――

ここではため息、すすり泣き、大きな嘆きの声があたりにこだましていた――おそろしい言葉が、  
悲しみの言葉、憤りの口調、  
大きなかすれ声、そうしたなかに手をたたく音がする

この惨めな人びとの多くが美しい若い女性だった。彼女たちの苦悩を高ぶらせ、同時になだめながら、説教師たちはそのあいだを動き回った。「シスター、いとしいシスター」とささやく声が聞こえてきた。狡猾な唇が不幸な娘たちの頬に近づけられるのもわたしは見てしまった。哀れな犠牲者たちが告白をつぶやくのが聞こえたし、彼女たちを苦しめた者たちが娘の青白い頬を真っ赤に染めるような慰めの言葉を耳元に吹き込むのも目撃した。もしもわたしが男だったら、きっと性急な妨害行動に走ってしまっただろうし、イギリス人男性が居あわせた場であんな場面を演ずれば、彼は直ちにお仕置きを加えていただろう、とも信ずる。イギリスだったら、あんな不穏で悪意ある場面を押さえるために、きっと適用されたであろう、有益な懲罰となる単調な仕事は言うまでもない。

床にみんながひれ伏したあとに起こった最初の騒ぎのあと、うめき声が多くの場合には明快な大声で聞こえるようになった。すると悲劇的気分と滑稽な気分のあいだを奇妙に揺れ動くのを、わたしは経験してしまった。

カノーヴァ（訳注イタリアの彫刻家アントニオ・カノーヴァ [一七五七～一八二二]）が制作したマグダラのマリア像よろしく、わたしたちの目の前で跪いていた素晴らしく美しい娘が、あれこれたわごとを並べるなかで、突然こんな風に叫んだ――「ああ、信心を捨てた者に災いあれ、お聞きください、お聞きください、イエス様、十五のときに、わたしの母は亡くなりました。わたしは信仰を捨てたのです。おおイエス様、信仰を捨てました。母の元に帰らせてください、イエス様、母の元に帰らせてください、へとへとなんです。ああ、ジョン・ミッチェル、ジョン・ミッチェル」、そして両手をあげて哀れを誘うように泣きじゃくると、死んだように真っ青な美しい顔をふたたびあげて言った。「日の



当たる救いの土手で、母と並んで座ることができるでしょうか。いとお母さんと。ああイエス様、家に戻してください、帰らせてください。」

これほど若く美しい娘が、こうして真剣に死を希求する姿を見て誰が涙を禁じ得ようか。だが、その場をわたしが離れるまえに、放蕩児ドン・ファンそっくりの男に片手をしっかり握られ、顔を支えられた彼女が、地下の世界に入るには邪悪すぎるというので地上に送り返されるのを、わたしは見てしまったのである。

わたしたちがそこいた恐ろしい二時間のあいだ、側にいたひとりの女がいつときたりとも間をおかず、これ以上は出せないほどの大声で「イエスへの呼びかけ」（という言い方をしていた）を続けた。嫌になるほど声がかすれ、顔つきときたら真っ赤で血管が破裂するのではないかと思わせるほどだった。あれこれと大げさな言葉を使うなかで言うには、「イエス様を離さない、イエス様を行かせない、地獄に連れて行かれることがあってもイエス様をしっかりと、しっかりと、しっかりと抱きしめる。」

説教師が賛美歌を歌おうとして、おかげで気が遠くなりそうな喧噪がときに調子を変えることはあったが、哀れな狂人たちの痙攣するような動作は激しさを増すばかり。このぞっとする邪悪な恐ろしい場面は、とうとうわたしたちがその場を出て行かざるを得なくなるほど野卑なものになった。真夜中の三時頃に馬車に戻ったわたしは、そのあとずっと夜通し「困い」の騒ぎがますますひどくなるのに耳傾けて過ごした。寝られるはずがなかった。夜明けになるとふたたびラッパが鳴って、個人礼拝に人びとは戻っていった。そのあと一時間ほど経つと、まるでひと晩をダンスで過ごしたかのように、集会全体が十分な朝食の準備とそれをガツガツ食べるのに陽気で熱心に取りかかっているのがわかった。前夜は悪霊に取り憑かれた人間だと思っていた美しいが青ざめた顔がたくさん見つかり、いまは伊達男の側で照れ笑いしながらホット・コーヒと卵を丁寧に授けている。説教する聖人と怒号する罪人とが等しく、体力を回復するために食事を楽しんでいるようだった。

あれほど奇妙な過ごし方をした夜がすんだあとでは、爽快な気付け薬となった強い紅茶をたっぷり楽しんだわたしは、ひとりで森をぶらぶらとさまよったが、森の完璧な静寂がこれほど魅力的だった記憶がない。

やがてわたしたちは集会場をあとにした。だがそのまえに知ったのは、説教師たちが聖書、小冊子、そしてあらゆる宗教的目的のためにたいそう満足できるほどの献金を集め終えたということだった。

## *Domestic Manners of the Americans* by Frances Trollope

Naoto SUGIYAMA

While Mark Twain was writing *Life on the Mississippi* (1883), he read for reference some travelogues published in his youth by the visitors from Europe. As a result of the concentrated attention the Union in the early decades of the 19th century won on the other side of the Atlantic, some intrigued critics crossed the sea to observe and evaluate “the great experiment” conducted at the time in the New World. Twain makes no mention of *De la Democratie en Amerique* (1835) by Tocqueville which is now so firmly established as erudite records of the journey to answer the question “What is America?”, but repeatedly applauds *Domestic Manners of the Americans* published three years earlier than the French classic by an English lady Frances Trollope. This article is a Japanese translation of the two chapters 14 and 15 from her work, where she sarcastically but allegedly with faith reports the cultural and religious climate of fledging Cincinnati.